

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.29

今週のキーワード! シッキム

インドの喉仏

『インド私録』の最終章、「南アジアの国々とのかかわり」は、武藤氏のシッキム、ブータン、そしてダライ・ラマ 14 世への訪問で締めくくられています。いずれもインドにとって中国とのかかわりにおいて重要な意味を持つ訪問先です。

これまでの放送で武藤氏は「インドにとって中国は脅威の対象」と述べています。中国が 1950 年にチベットに侵攻し、その後中国に併合したことで、インドと中国は直接国境を接するようになったためです。

地図で見るとわかるようにシッキムは、チベットとバンクラデシュ、ブータンにはさまれたところにある、武藤氏曰く「インドの喉仏」であり、チベットが中国領になった以上何が何でもインド領にすることが戦略的に重要な地域でした。実際、1962 年には中国はチベットとシッキムを結ぶナトゥラ峠を越えてシッキムに進入、両国は国境紛争に突入しました。

ナトゥラ峠は古くからインドとチベット、中国を結ぶ交易路として使われてきましたが、中印の国境紛争が激化したのに伴い長らく閉ざされた状態が続きました。しかし、中国の温家宝首相が 2005 年 4 月の訪

印時にシッキムをインド領として正式に認めたことで、今はこの交易路も復活しています。

インドの喉に刺さったトゲ

ダライ・ラマ 14 世

シッキムが「インドの喉仏」であれば、「インドの喉に刺さったトゲ」と武藤氏が語るのがダラムサラのダライ・ラマ 14 世の存在です。チベットが独立国家であったと主張し、亡命政府を樹立したダライ・ラマ 14 世をインド国内に置くことは、中国を脅威と考えるインドにとって、中国との関係上不都合なことも多くあるからです。

しかし、インドはダライ・ラマ 14 世とその一行を受け入れ、チベット亡命政府樹立に当たっては、ダラムサラに拠点を提供しています。また、チベットから亡命してくる大勢の難民をも受け入れています。武藤氏の考えでは、それはインドの寛容を世界に示すことにもなり、インドにとっ



1963 年 11 月、ダライ・ラマをヒマーチャル・プラデシュ州ダラムサラに訪ねた武藤氏。京都東本願寺から託された梵鐘をダライ・ラマに贈呈。写真:武藤友治氏蔵

てマイナスにはならないのです。

武藤氏がこのダライ・ラマ 14 世をダラムサラに訪ねたのは、1963 年のことで、京都東本願寺からの要望で、梵鐘をチベット難民キャンプに送り届けるという任務を背負ってのものでした(写真ご参照)。

初めて会った時のダライ・ラマに対する武藤氏の印象は、「非常にニコニコと笑みを絶やさない好青年」というもので、英語を流暢に話し、カリスマ性を持つ眼光鋭い指導者という現在の姿は想像もできなかったといいます。というのも、このときの会談は英語とチベット語の通訳を介してのもので、ダライ・ラマ自身では英語は一言も話さなかったからでした。『ダライ・ラマ自伝』(山際素男訳)によれば、ダライ・ラマは亡命当初からインド政府から英語講師を手当てされ、インド政府の連絡員からも英語を教わったと語っています。ただ、あまり熱心な生徒ではなく、このときもっと一生懸命に勉強していればよかったと述懐しています。

また、『自伝』では、難民の子供たちの教育問題に並々ならぬ関心を示し、実際に支援もしたネルー首相から、「将来の国際語」となる英語を教育手段として使うことを忠告されたとも語っています。

みなさまよいお年を!

